

論文

ファクター制度とオーバートレーディング

— 1820年代前半を中心に —

上 村 能 弘

【概 要】

はじめに

資本主義の体制が成立したとされる1820年代前半になると、ファクター制度における前払い金も引き受け信用のかたちで供与されることとなった。同制度は、世界資本主義の体制とともに、世界的に編成された銀行制度と一体となって完成したのであった。

この1820年代前半はまた、イギリス・ランカシアの綿工業を主導産業とする世界資本主義の経済にオーバートレーディングがもたらされた時期でもあった。それは1825年に世界恐慌というかたちで清算されたが、つまり、資本主義の体制の成立は、歴史必然的に景気循環をとまなうこととなったのである。

ファクター制度は、本来は文字通りの委託荷販売を前提とする仕組みであった。しかし、委託荷販売は、商品が売れていくだろうという見込みにもとづいておこなわれる冒険取引の範疇を、結局は出るものではなかった。同制度や銀行制度を通じた前払い金の供与もまた、同じく見込みにもとづいておこなわれざるをえなかった。

1820年代前半に資本主義の体制とともに完成したファクター制度は、その完成とともに同時期のオーバートレーディングを通じて仕組みのうえでの欠陥を露呈させ、1825年の恐慌を契機に早くも衰退の道をたどりはじめたのであった。

1820年代前半は、「商品経済が支配する体制」である世界資本主義にとっては、ひとつの画期となる時期であったとされる。すなわち、この時期になると、資本主義の最初期の主導産業であった綿工業において、その基幹部門となる紡績業の労働力が〈低賃金不熟練労働力市場〉を通じて調達される態勢が、成立することとなったのである¹⁾。「このことは、労働力の商品化を核とする資本主義の体制の成立したことを意味する」²⁾。

この場合の綿工業は、イギリスはランカシアという一地方を中心に興隆したものではあったが、それはまた同時に「世界の綿工業」としての性格を持っていた。ランカシアの綿工業にとっては、その原料である棉花はアメリカ合衆国などから確保され、またそれにもとづいて生産された綿製品も東インドなどへと販売されていたのである。つまり、「世界の綿工業」は、原料調達の点においても、また製品の販路という点においても、歴史的には世界市場に依拠しながら展開するものであった。この意味で、なによりもまず棉花や綿製品をはじめとする世界商品を流通させる仕組みであったファクター制度（委託荷販売制度）が、同じ1820年代前半までに完成していったことには、大きな歴史的な意義を見いだすことができる。

そしてまたファクター制度は、世界商品の取引

¹⁾ 入江〔14〕、46ページ、参照。

²⁾ 入江〔14〕、59ページ。

を決済し、それを前提に世界商品の流通や、ときには生産にまでも、そのための資金を供給する仕組みでもあった。同制度のなかで供与された引き受け信用、すなわち、のちにはオープン・クレジット (Open Credit) ともよばれるようになったものは、やがて為替手形に姿を変えて市中を流通し、銀行によって割り引かれることとなった。それにより、今度はロンドン世界金融市場への送金手段が、ドラフト (銀行手形) というかたちで振り出されることとなったのである。ファクター制度は、銀行制度とも一体となって編成され、1820年代前半以降の世界商品市場の歴史的展開を、通商の決済や資金供給の面からも支えたのである。

しかし、こうした世界資本主義は、商品経済が支配する体制であったがゆえに、歴史必然的に景気循環をとまわなければならなかった。そのいわば揺籃期ともいえる18世紀の末までには、社会的に過剰な生産と過剰な通商、過剰な信用供与などといった状況が、すでに繰り返して引き起こされるようになっていた。こうした状況は、その当時においては一般には「オーバートレーディング (Over-Trading)」などとよばれた³⁾。そして、「労働力の商品化を核とする資本主義の体制の成立した」1820年代の前半になると、同様なオーバートレーディングが、ランカシアの綿工業を主導産業としながら世界経済に及ぶかたちで引き起こされることとなったのであった。それは、1825年に至り、世界恐慌というかたちで清算されていかざるをえなかった。イギリスはランカシアの綿工業は、こうした世界的な景気循環・世界的な恐慌を歴史的に主導する産業であったという意味でもまた、「世界の綿工業」であったといえよう。

³⁾ 立川 [26], 91 ページによれば、1776年に『国富論 (An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations)』を世に問うたアダム・スミス (Adam Smith, 1723-1790年) も、すでに「……貨幣不足の不満の原因を、高利潤の見込みから生じる過剰取引 [overtrading] という一般的な傾向に求めている」という。

この小論では、そうした世界資本主義経済を、棉花や綿製品をはじめとする世界商品の流通や、その決済・資金供給の両面から支えたファクター制度と、1820年代前半に引き起こされたオーバートレーディングとの関わりについて探ってみることとする。ここではとくにイギリス・ランカシアにおける「世界の綿工業」に焦点を当てながら、同時代の経済界・金融界で活動していた人々の証言を通じて、ファクター制度のもつ仕組みのうえでの欠陥を改めて浮き彫りにしてみよう。そして、そうした試みを通じて、ファクター制度のもつ仕組みのうえでの欠陥は、実はそのまま、その当時の「商品経済が支配する体制」のもつ仕組みのうえでの、あるいは「労働力の商品化を核とする資本主義の体制」のもつ仕組みのうえでの欠陥でもあったことが、示唆されることになるであろう。

I ファクター制度の特徴

ここではまず、ファクター制度の歴史的な特徴について改めてふれておくことから始めよう。

ファクター制度は、まずなによりも文字通りの委託荷販売のための仕組みであった。この仕組みのなかでは、委託人によって積み出された委託荷は、通常、受託人 (委託荷販売業者) の裁量にもとづいて、委託人の名前ではなく、受託人の名前で販売されていった。もともと、この仕組みのなかでおこなわれる委託荷販売は、委託人が債務不履行に陥り、その結果、担保物件 (委託荷) が受託人によって差し押さえられ、処分されるという形式をとってはじまっていたことに由来する⁴⁾。ここに、ファクター制度の歴史的な特徴のひとつが表れている。

ファクター制度はまた、世界商品の通商をおこなう際に利用される決済のための仕組みとしても機能した。そして、この制度のもうひとつの特徴

⁴⁾ Buck [2], pp. 4-8 & pp. 17-19, 参照。

は、その決済にともなって、前払い金というかたちでの資金が供給されたということであった。旧来のコムエンダは、古代の地中海交易のなかに起源を持つものであったが、11～12世紀ごろになると次第に4つのコムエンダ（アコメンダチオ）による資金融通の仕組みができあがっていった⁵⁾。つまり、仕向地側における仕向地側の通貨による返済を前提に、通商業務に先だて、「輸入商人」に当たるコムエンダから、「輸出商人」に当たるコムエンダに対して、本国側で本国側の通貨によって必要な資金が提供されたのであった。ファクター制度は、こうした仕組みのなかから、「輸出商人」の貨物上乗人ないしは輸出先に常駐する代理人に当たるコムエンダがいわば退場し、それによって「輸入商人」の代理人がファクターに転化することで成立していったものである。それゆえ、同制度においても、やはり通常は「輸入商人」に当たる受託人から、「輸出商人」に当たる委託人に対して、輸出商品の“委託荷販売”に先立って一定の資金が供与されることになったのであった。

委託荷販売がおこなわれる際に委託人が陥る形式上の債務不履行は、実は、この受託人から供与された前払い金というかたちでの債務の返済を、委託人が履行できなくなるということに相当する。したがって、いま見てきたようなファクター制度のもつ2つの特徴は、実際にはひとつの特徴のふたつの表れと考えることもできる。ファクター制度は、委託荷販売という商品流通と前払い金の提供という資金供与とを、まさに不可分のものとして、ひとつのものとしておこなうための仕組みであったのである。たとえば、1833年6月20日にイギリス議会のある委員会において、ジョン・ユーアート（John Ewart）は、次のように証言している⁶⁾。ユーアートは、アメリカ合衆国や西イ

ンド諸島、南アメリカ、東インドなどからのさまざまな商品をリヴァプールで取り扱っていた人物である。ここではとくに、ユーアートは、アメリカ合衆国からイギリスに輸出されてくる委託荷について述べている。

4140. リヴァプールでは、代理業務をおこなう商社が、受け取る委託荷について前払いをするようになってきているのですか。——そうです。

4141. 非常に広い範囲にわたって、こうしたやり方で貿易はおこなわれているのですね。——そうです。

4142. あなたのところのような大きな委託荷販売商社からみて、こうした前払金を支払わずに、合衆国からなほほかの委託荷を受け取っている人がいるとお考えですか。——いいえ。一般的に言えば、前払い金を支払うことなしに合衆国から委託荷を受け取ることはできないと思います。

しかも、輸出商品は、その積み出し地から仕向地へと、実際にはいくつもの中間的な業者の手を経て委託荷販売されることが多かったことから、それにとまって前払い金もしばしば連鎖的に供与されたのであった。1823年のイギリス議会におけるある委員会においては、次のような報告がなされている⁷⁾。

…〔略〕…商品を担保とした前払い金は、そうした前払い金を申し込む人の心に疑念と注意とを刺激するはずの不規則な取り引きでも、あるいは異常な取り引きでもない。そうした場合であるどころか、まちがいに我が国の商取引の大部分は、船積みと販売の間の一定期間の前払い金という手段によって支えられている。そして、多くの場合には、すぐに換金できるような有利な販売を見いだすことが難しいので、はじめに外国の船積み人すなわち委託人による外国の所有者に対する前払い金があり、次に受託人、つまりその人自身はファクターであるわけであるが、その受託人から委託人に対する前払い金があり、そしてそのあとには、ある資本家によるファクターへの前払い金があるのである。

ともあれ、ファクター制度においては、輸出商

⁵⁾ たとえば、1330年における事例となるが、de Roover〔4〕, pp. 51-52に紹介されているものを参照。

⁶⁾ Gt. Brit. Parliament〔8〕, pp. 253-254.

⁷⁾ Gt. Brit. Parliament〔9〕, pp. 7-8.

品の委託荷販売に先立って、受託人から委託人へと一定の資金が供与された。そして、その資金にもとづいて輸出商品が準備され積み出されて、委託荷販売されていく。こうしたことを通じては、一連の通商上の事象が、いわば、受託人にとっての帳簿のうえに借方として記録されていくことになるであろう。その一方、そこで供与される資金が、委託される商品代金の、その金額の一部であれ全額であれ、実際の販売が完了する前に支払われる「前払い金」であるかぎりでは、同じ一連の通商上の事象が、受託人にとっての帳簿のうえには貸方としても記録されることになっていくであろう。

かつての4つのコムエンダによる資金融通の仕組みのなかでは、「輸入商人」から「輸出商人」へと、輸出商品が販売されていくのに先立って一定の資金が提供された。そのことにより、「輸出商人」は「輸入商人」に対して、その資金相当分の債務を負うことになる。そして、輸出商品が実際に販売されていけば、「輸出商人」は、今度はその貨物上乗人ないしは代理人に対して、輸出商品の代金相当分の債権を持つことになる。そういう旧来の資金融通の仕組みから、やがて「輸出商人」の貨物上乗人ないしは代理人が退場することにより、ファクター制度においては、委託荷は受託人の代理人たるファクターを通じて販売されることになる。それゆえ、ファクター制度のなかでは、委託人は、究竟して受託人側に対して債務を負いながら債権を持ち、受託人は、究竟して委託人側に債権を持ちながら債務を負うことになるのである。

こうして、ファクター制度においては、受託人にとっての帳簿のうえには、前払い金の供与を通じて、委託人の預金が創造されていくこととなったのであった。そして、この創造された帳簿のうえでの預金を前提に、委託人は受託人宛ての為替手形を「過振り (overdrawing)」のかたちで、いわば自己撞着的な記録にもとづいて、振り出していくことが可能となったのである。たとえば14世

紀のブルージュでは、両替商が銀行へと転化していくことがみられた。この際、「銀行における譲渡 (assignment in bank)」すなわち預金口座のうえでの振り替えがおこなわれることを前提に、「少額の準備金 (fractional reserve)」のみにもとづいて、顧客の当座預金への過振りを通じた資金の貸し出しがおこなわれるようになっていった⁸⁾。あるいはまた、17世紀のイングランドにおいては、金匠がゴールドスミス・バンカーへと転化していった。この際にも、「……通商が進んでいくのにしたがって、貨幣は持ち出されるやいなやもたらされる」ものであったことから⁹⁾、金匠の手元の準備金が一定に保たれ、その結果、全預金残高から準備金を除いた分を運用に回すということがおこなわれるようになっていった¹⁰⁾。つまり、これらと同様のことが、ファクター制度においてもおこなわれうようになっていったのである。本来は委託荷販売のための制度であるファクター制度は、いわば信用創造の仕組みでもあり、同制度のなかで委託荷販売をおこなう受託人としての委託荷販売業者は、この意味では字義通りのマーチャント・バンカーとして機能したのであった。ここに、ファクター制度のもつもうひとつの歴史的な特徴を見いだすことができる。

委託人によって振り出された受託人宛ての手形は、やがて国内の銀行によって割引かれることとなった。このことは、世界商品が世界市場に委託荷販売されていくことに對し、引き受け信用というかたちでの前払い金という資金が、国内で供与されていったという意味にほかならない。旧来の4つのコムエンダによる資金融通の仕組みにおいては、「輸出商人」により、いわば“外国 (outland)” 為替手形が、輸出先に常駐する代理人に宛てて振り出された。これに対してファクター制度においては、委託人により、いわば“内国

⁸⁾ de Roover [4], p. 350; 田中 [27], 7-8ページ, 参照。

⁹⁾ North [17], p. 21, 参照。

¹⁰⁾ Powell [19], p. 62, 参照。

(inland)”為替手形が委託人に宛てて振り出されたのである。ここにも、旧来の遠隔地通商の仕組みと比べた際のファクター制度の特異な点が見いだせる。そしてまた、世界商品を世界市場で委託荷販売していく仕組みであるファクター制度は、委託人宛ての手形が国内の銀行によって割引かれたという意味では、国内の（地方の）銀行制度と一体となって展開するものであったと理解することができる。

国内の諸銀行は、ファクター制度における受託人宛ての手形を割引くことで、ロンドン世界金融市場宛てのドラフトを振り出すことが可能となった。綿製品や棉花に代表される世界商品は、文字通り世界市場で委託荷販売されていくものであったが、その最終的な決済はロンドンにておこなわれていく仕組みとなっていたことに照応するものである。「産業革命」期においては、ランカシアの地方銀行によって、イギリスからの綿製品の“輸出”にともなって振り出された内国為替手形が割引かれた。また、第2合衆国銀行（the Second Bank of the United States）や州法銀行によっては、アメリカ合衆国からの棉花の“輸出”にともなって振り出された内国為替手形が割引かれた¹¹⁾。そして、これらの諸銀行によって、同じくロンドン世界金融市場宛てのドラフトが振り出されて、それらが世界商品の“輸入”にともなう支払い手段として用いられたのであった¹²⁾。すなわち、ファクター制度を通じ、世界商品が世界市場で委託荷販売されていくのにもなって、国内の銀行によってロンドン世界金融市場宛てのドラフトが振り出されることとなったのである。この意味では、ファクター制度と一体となっていた国内の銀行制度は、やはり世界的に編成されたものであったと理解することができる。そして、こうした世界的な銀行制度を通じて、しばしば前払い金が供与され、預金の創造がおこなわれていった

のであった。

イングランドにおいては、こうした委託荷販売業者からの前払い金の供与は、1820年ごろまでにはおこなわれるようになっていた。つまり、「世界の綿工業」であったランカシアの紡績部門において、その労働力が「低賃金不熟練労働力市場」を通じて調達される態勢が成立したのと、相前後した時期のことである。1833年5月16日にはイギリス議会のある委員会において、カークマン・フィンリー（Kirkman Finlay）が、次のような証言をおこなっている¹³⁾。この人物は、ロンドンやグラスゴー、リヴァプールなどで商品一般を扱う商人であり、アメリカ合衆国のチャールストンやニューヨーク、ニューオーリンズでの事業についてもよく知っていたという。またここでは、フィンリーが、イギリスから海外へと綿製品が輸出されていくことを念頭に、前払い金の供与に関して、ある種これを危険視するような文脈のなかで証言していたことにも注目しておこう。つまり、19世紀を生きるフィンリーや当該委員会の委員たちも、前払い金の供与が預金を創造するものであったこと、言い換えれば、必ずしも正貨にもとづかずに前払い金が供与され、結果的に経済に対して供給される信用が過度に膨張しかねないことを、おそらくは正しく見抜いていたのであった。

729. この国の棉花関係の通商が、現在、健全な状態にあることについて、その唯一の例外だとあなたがお考えになることは、いま採られているような仕組み、つまり綿織布業者たちが、その商品に対するしかるべき前払い金を、輸出に先立って商人たちから求めるといふことだとおっしゃいました。その仕組みは、どのくらい続いてきているのですか。——1820年か1821年ごろにはじまったと思います。

ともあれ、こうした前払い金の供与のはじまりは、単なる文字通りの委託荷販売のための仕組みではなく、銀行制度と一体となった信用の仕組み

¹¹⁾ Green [12], pp. 86-94, 参照。

¹²⁾ 入江 [14], 64-65 ページ, 参照。

¹³⁾ Gt. Brit. Parliament [8], p. 44.

でもあったファクター制度の完成を示すひとつの指標である。また、1825年ごろまでにはスコットランドの西部においても、商品を海外へ委託荷販売することが広くおこなわれるようになっていたのであった¹⁴⁾。

こうして前払い金が供与されることは、とくに委託人の立場からいえば、ファクター制度を利用することのひとつの大きな利点となっていたといえよう。つまり、委託人はこの前払い金に依拠しながら委託荷の仕入れをおこなって、あるいはまた委託荷の生産をおこなって、これを受託人側のファクターに送り出すだけで、売り上げと仕入れとの差額、つまりは利益を事実上得ていくことができたのであった。委託人の営利という目的は、前払い金の供与により極速に円満する。このことは、新興の、脆弱な財務基盤しかもっていないような企業にとっては、換言すれば、19世紀初頭のランカシアにおいて「新工業製品」を生産しはじめたばかりの綿工業や、その原料や製品を扱う貿易業を営む企業などにとっては、とくに重要なことであつたらう。

そしてまた、17世紀中葉までにはイングランドにおいては、すでに手形の裏書譲渡制もできあがっていた。この点でもまた、ファクター制度は、旧来の4つのコムエンダによる資金融通の仕組みとは異なっていた。つまり、旧来の仕組みのなかでは、外国為替手形に基づく債権の直接的な取り立ては、通常は輸入業者の輸入先に常駐する代理人によってなされた。こうしたことから、その受取人欄には、当該代理人の名前が書かれたり、あるいはまた当該代理人が輸入業者からの指図人として記載されたりしたのであった。これに対して、手形の裏書譲渡がすでに可能となっていた時代のファクター制度では、そこで振り出された内国為替手形は、一定の満期をもちながらも、一般的には持参人払い文言をもつものであった。それにより、当該の内国為替手形は、19世紀初頭までに

は「……裏書きで覆われてしまうまで、手から手へと流通する」ことが可能となっていた¹⁵⁾。その結果、支払い指図書であった為替手形は、借方の文言をもつ債務証書たる銀行券と同様に、流通貨幣として市中を流通しえたのであった¹⁶⁾。

19世紀初頭までにイングランドの多くの地域では、当該地域における多くの地方銀行が発行した多くの銀行券が流通するようになっていた。これに対してランカシアにおいては、地方銀行の銀行券よりも、むしろ為替手形が流通貨幣として広く利用されていった。ランカシアにおいて流通する貨幣の割合は、「イングランド銀行券がおよそ10分の1で、為替手形の割合は少なくとも10分の9ぐらい」でもあったとされる¹⁷⁾。それは、ひとつには、当時のランカシアがまさに「新工業製品」たる綿製品の生産地であり、したがって、生産したものを海外などへ販売していくという目的を達成するために、引き受け信用のかたちで前払い金を供給してくれるファクター制度が大いに利用されていったこととも関係していたといえるであろう。

しかし一方、先にふれたカークマン・フィンリーたちの懸念は、実にもっともな面をもっていたともいえる。委託荷販売は、畢竟、見込みにもとづいた通商方法である冒険取引の範疇を出るものでは決してなかったのである。

なんらかの理由で、売れそうだという見込みがもたれば、その売れそうだという見込みのもとに商品が生産され、その売れそうだという見込みのもとに商品が委託荷販売されていく。売れそうだという見込みのもとに生産され委託荷販売されていくことを前提に、引き受け信用のかたちで前

¹⁴⁾ Smart [24], Vol. 2, pp. 329-330, 参照。

¹⁵⁾ ロンドン・シティの銀行業者で、マンチェスターのある銀行のパートナーでもあったルイス・ロイド (Lewis Loyd) による1819年2月24日における証言 (Gt. Brit. Parliament [10], p. 82, Q. 12)。

¹⁶⁾ Scarlett [21], p. 55, 参照。

¹⁷⁾ 前出, ルイス・ロイドによる証言 (Gt. Brit. Parliament [10], p. 82, Q. 12)。

払い金が供与され、帳簿上に預金が創造される。売れそうだという見込みのもとに振り出された為替手形によって商品が仕入れられ、それが仕向地へと積み出されていく。売れそうだという見込みのもとに振り出された為替手形が銀行によって割り引かれる。売れそうだという見込みのもとに振り出された為替手形が銀行によって割り引かれることによって、銀行によりドラフトが振り出され、輸入商品が買い込まれる。売れそうだという見込みのもとに振り出された為替手形が、商品取引にともなってその持ち主を次々と変え、流通貨幣として市中を巡る。つまり、売れそうだという単なる見込みがもたれば、それに基づいてオーバートレーディングが到来しかねないのである。カークマン・フィンリーは、先の証言に先立って、次のようにも述べている¹⁸⁾。

624. 利潤が少ない状態、つまり、これまであなたがおっしゃってきただようなことに照らし合わせると、棉花関係の通商の状態は、目下のところ、健全であるとお考えですか。——手元の在庫は取るに足らないものですし、支払いもうまくいっていると思います。なんらかの不健全なものがあるとするれば、それは、ここ数年で非常に広く行き渡っていることがおこなわれていることから、つまり、織布業者 (manufacturer) が、その生産物を外国に向けて大量に委託荷販売し、前払い金を手形で受け取って、ロンドンやこの国のその他の地方のお金を持った人に、それらの手形を割り引いてもらうということ、そのことは、それ以外のものが生じさせるものよりも、結果として大きな拡張につながってきたものですが、そういうことから生じていると思います。

… [略] …

627. それではあなたは、棉花の通商に影響を与え、その一部門を不健全なものにしている事情は、まさに、商品を委託荷として非常に遠くの市場に送るといった投機 (speculation) が織布業者によってなされていることにあり、また、国内通商や近隣諸国との通商といった他の部門については健全な状態にあるとお考えなのですね。——ひとつの事情としては、ご質問のなかでは省略されていますが、つまり、商品が送り出される前に、それに

対して前払い金が支払われるということが、私の言及したように通商が不健全であることの本原因となっていると思います。

売れるだろうという見込みは、前払い金の供与を通じて、「それ以外のものが生じさせるものよりも、結果として大きな拡張につながって」くる。しかし、そうした見込みが、なにかの拍子にいったん外れることになってしまえば、オーバートレーディングの次にやってくるものは、「不健全」などという生半可のものではなく、実際には恐慌という明らかな破滅にほかならなかったのであった。

II オーバートレーディングの契機

1820年代の前半は、イギリスの経済にとっては、いわば金融緩和の時期でもあった。長らく続いたナポレオン戦争が1815年に終結し、その戦争によってもたらされた経済・金融的な混乱がようやく収まってきた時期に相当する。

イングランド銀行は、1821年2月に適正手形の期間をそれまでの65日から95日に延長するとともに¹⁹⁾、1822年6月20日付でバンク・レートをそれまでの5パーセントから4パーセントに引き下げた。この4パーセントという当時としては比較的低い水準であったバンク・レートは、1825年12月13日付で再度5パーセントに引き上げられるまで保たれた²⁰⁾。ロンドン金融市場での手形割引率についても、1822年になると一般的に5パーセント以下に低下した。また、1824年の第1・四半期から1825年の第1・四半期までの各四半期においては、最優良手形の割引率の平均もおおよそ3.5パーセントとなって、これらもまた当時としては比較的低い水準で推移し

¹⁹⁾ King [15], p. 35 (邦訳, 42ページ), 参照。

²⁰⁾ Clapham [3], Vol. II, p. 429 (邦訳, II, 474ページ); Mitchell and Deane [16], p. 456; Geyer, *et al.* [6], Vol. I, p. 201, 参照。

¹⁸⁾ Gt. Brit. Parliament [8], p. 35 & p. 36.

たのであった²¹⁾。

こうした状況のなかで、イギリスの国家財政の負担を軽減し、またマネー・サプライを増加させるような措置もとられた。1822年には、およそ1億4,000万ポンド・スターリング分以上ともいわれる5パーセント利付き国債が、4パーセント利付きのものに転換され、これにより年間およそ112万ポンド分の財政負担が軽減された。また、1824年にも、およそ7,600万ポンド分ともいわれる4パーセントの利付き国債が、 $3\frac{1}{2}$ パーセントのものに転換され、年間およそ38万ポンド分の財政負担が軽減されたのであった²²⁾。

また、1822年には400万ポンド・スターリング分の大蔵省証券(Exchequer Bills)がイングランド銀行によって買い上げられ、1823年にはデッド・ウェイト年金(the Dead Weight Annuity)証券の同行による買い入れも政府との間で取り決められた。このデッド・ウェイトは、陸海軍関係の年金を、向こう45年間にわたって毎年58万5,740ポンド分の年金に転換しようとする計画にもとづくものである。同年3月に、1,308万9,424ポンド分の年金証券を、1828年4月までの分割払いの条件でイングランド銀行が買い入れることとなり、また、その実際の支払いも1824年にはじまっていた²³⁾。

1823年4月3日には $73\frac{1}{2}$ ポンド・スターリングであった3パーセントの利付きコンソル債の市場平均価格が、1824年4月2日には、 $94\frac{1}{2}$ ポンドにまで上昇している²⁴⁾。これにともない、その利回りは1823年の平均では3.8パーセントであったものが、1824年には平均で3.2パーセントに低下した²⁵⁾。また、大蔵省証券の利率につい

ても、1823年の平均2.4パーセントから1824年には2.3パーセントへと低下している²⁶⁾。

こうしたバンク・レート引き下げや政府証券などの利子・利回りの低下は、やがて一般の人々の間に外国政府債への投機熱を引き起こした。イングランド銀行の総裁であったジョン・ホースレイ・パーマー(John Horsley Palmer, 1779-1858年; 総裁の在位: 1811-1857年)は、1832年6月5日にイギリス議会のある委員会で、次のような証言をおこなっている²⁷⁾。

606. 1825年における恐慌の性質と経過は、あなたのご意見では、どのようなものであったか、当委員会に述べていただけませんか。——… [略] …私は常々、熱狂へと向かう第一歩は、我が国の政府証券類に係る利子が低くなることだと考えてきました。この点からすれば、最初の動きは、私が思いますに、1億3,500万ポンド・スターリング分の5パーセント利付債に係る利子の低下が、1823年に起こったというものでした。次の年、1824年には、8,000万ポンド分の4パーセント利付債の利子の低下が続きました。利子の低下は、一方の場合は5分の1の、他の場合には8分の1の低下であったわけですが、全体として公衆の心に熱中した気分を醸しだし、それが、ほとんどすべての人に投資への提案を受け入れるよう促し、しかしながら馬鹿げたものであっても、それが受け入れられていくと、私は常々考えてきました。この時期の熱狂は、南アメリカの諸共和国が我が国によって承認され、鉱山業に従事することや、そうした政府に融資することへの誘因がもたれたことによって、いっそう促進され、イングランドにおけるコミュニティのすべての階層が、それに参加したように思われます。そうした投機とほとんど同時に、商品生産(commercial produce)に対する一般的な投機が起こり、それが我が国と他の国々との間の相対的な価値に混乱をもたらすという結果となって、不利な外国為替を生み出し、それが1824年10月から1825年11月まで続きましたので、イングランド銀行からの非常に多額のおよそ700万ポンド分もの地金の輸出を引き起こしたのです。… [略] …

21) Silberling [23], p. 241 & p. 257, 参照。

22) Porter [18], p. 580, 参照。

23) Smart [24], Vol. II, pp. 85-88 & 152; Tooke [28], Vol. II, p. 179 (邦訳, 第2巻, 166-167ページ); Geyer, et. al. [6], Vol. I, p. 206, 参照。

24) Tooke [28], Vol II, p. 148 (邦訳, 第2巻, 140ページ), 参照。

25) Silberling [22], p. 289, 参照。

26) Silberling [22], p. 291, 参照。

27) Gt. Brit. Parliament [7], p. 47, 参照。

先にふれた国債の転換について、その額や時期などが一部整合しないようであるが、しかしそれでもこのパーマーの証言からは、そうした「我が国の政府証券類に係る利子が低くなる」ことで、やがてさまざまなものに対する「投機」が引き起こされていったことがうかがわれる。

ロンドン金融市場で発行された外国政府債の発行高は、1822年においては、およそ2,401万8,000ポンド・スターリングであったが、ラテン・アメリカ諸国の政府債の発行高は、このうちの15.2パーセントあまりに相当するおよそ365万ポンドを占めていた。ところが、1824年になると、外国政府債の全発行高は、およそ1,420万ポンドに減少する一方で、ラテン・アメリカ諸国の政府債の発行高は、およそ1,090万ポンドに増加して、外国政府債の全発行高に占める割合も、およそ76.8パーセントに高まったのであった。また、同年の応募高でも、外国政府債への全応募高はおよそ1,110万ポンドであったのに対し、ラテン・アメリカ諸国の政府債への応募高はおよそ832万5,000ポンドであり、外国政府債への全応募高に占める割合でもおよそ74.9パーセントを占めた²⁸⁾。こうしたことから、当時のロンドン金融市場では、とくにラテン・アメリカ諸国の政府債への投資が、実際にもかなりの規模でおこなわれていたことがわかる。

さらには、これも1820年代前半の金融緩和という状況のなかで、会社設立ブームともよべるものも到来した。たとえば、水道やガス、あるいは鉄道などといったインフラストラクチャー関係の事業や、銀行や保険といった金融関係の事業など、実にさまざまな事業がおこなわれ、投資がおこなわれていった。そして、パーマーの証言にも示唆されているように、同時期にはラテン・アメリカ諸国における鉱山業への投資も盛んにおこなわれていったのであった。

イギリスにおいて、1824-1825年に設立され、

1826年末時点で存続している会社は全部で127社あったが、このうちの44社は鉱山会社であった。この場合の全会社の発行名目資本額は、1億0,278万1,600ポンド・スターリングであり、そのうちの鉱山会社の発行名目資本額は、2,677万6,000ポンドであった。ラテン・アメリカにて事業をおこなう鉱山会社にかぎれば、その発行名目資本額は、1,935万2,000ポンドであり、それが鉱山会社の発行名目資本額に占める割合は、およそ72.3パーセントに達する。1826年末時点での払込資本額は、全会社のものが1,518万5,950ポンドで、鉱山会社のものは545万5,100ポンドであった。ラテン・アメリカ諸国で事業をおこなう鉱山会社のものは、361万9,500ポンドであり、全鉱山会社への払込資本額に占める割合はおよそ66.4パーセントに相当する²⁹⁾。資本金額の面から見ると、1820年代前半の会社設立ブームのなかにおいては、ラテン・アメリカ諸国での鉱山業という事業は、非常に大きな重みを持っていたことがわかる。

一方、先にふれたような外国政府債への投資、換言すれば外国政府による借款がなされれば、その借り受けられた資金は、実際には為替手形を用いて当該国へ送られていかなければならないであろう。それゆえ、その意味では、それらは、その手形の振り出しの前提となる世界通商とも連動していくことになるにちがいない。こうした見方は、はやくも1819年の3月2日にイギリス議会のある委員会において、ベアリング・ブラザーズ社(Baring, Brothers, & Co.)のパートナーであったスウィントン・コルトハート・ホランド(Swinton Colthurst Holland)によっても示されている。ここでのホランドは、主にフランス政府による借款を念頭におきながら、次のように証言している³⁰⁾。

²⁹⁾ English [5], pp. 4-10; Stone [25], pp. 37A-37B & p. 37D, 参照。

³⁰⁾ Gt. Brit. Parliament [11], p. 119.

²⁸⁾ Hobson [13], p. 101, 参照。

諸外国で借款がおこなわれた結果、我が国からどのくらいの価値の地金が送られることになったのか見積もることができますか。——どれだけのものが送られたかどうか、まったく疑わしいものです。当商会在、私が関係しているものですが、何をおこなってきたのかということについていうことができるのみですが、フランスの借款については、金であれ銀であれ、1オンス分も我が国から送り出したことはありません。

…〔略〕…

送金のうち、イギリスの臣民によるものについては、為替手形によるのか、イギリスの商品の輸送によるのか、あるいはその両方によるのか、どのように送金されているのですか。——当座の支払いは、為替手形によってなされてきていると考えべきでしょう。しかし、そうした為替手形を作り出すためには、イギリスの商品や他の国々の商品が、フランスやフランスにつながるのある国々へ輸出されていかなければならず、そうすれば、そこからもう一揃えの為替手形が振り出されて、それが支払いを調整することになるでしょう。たとえば、マンチェスターの商人が10,000ポンド・スターリング分の商品をニューヨークに船積みしたとしましょう。それらの商品は、ニューヨークで売られます。アメリカの別の商人は、10,000ポンド分のたばこをフランスに船積みします。すると、ニューヨークにそれらの商品が運ばれたことで、アメリカ側にマンチェスターの商人に対する負債が生じることになるでしょう。また、たばこを売ったことで、フランス側にはアメリカの商人に対する負債が生じることになるでしょう。その全体の支払いは、為替手形によって調整されます。つまり、アメリカの商人は、マンチェスターの商人に債務を負っているわけですが、フランスの取引先にたばこの代金相当額をイングランドに送るよう命じて、異なった国々間の取引は、為替手形によって決済されるのです。これが真の取引であって、毎日普通に起きていることです。

マンチェスターの人はフランスに債権をもち、それにもとづいて手形を振り出す、そしてそれを借款に投資したいと望んでいる人に売るというわけですね。——まさにそのとおりです。

こうした1820年代までにすでに知られるようになっていた見方にしたがえば、外国政府債への投資、つまりは外国政府による借款が、いま以上におこなわれていくのなら、為替手形に対する需

要もいま以上に高まり、イギリスからの綿製品を含む商品の輸出についてもいっそう促進されていくことになるだろう。実際、イングランド銀行の理事を務めていたジョージ・ウォード・ノーマン (George Warde Norman, 1793-1882年; 理事の在位: 1821-1872年) は、先にジョン・ホースレイ・パーマーが証言をおこなったイギリス議会の同じ委員会において、1832年6月26日に次のように証言している³¹⁾。

2810. 1824年と1825年にロンドンで資金調達された外国借款は、どのくらいのものであったか憶えておられるでしょうか。——記憶からは、その額をいうことができません。

2811. それら2年間に、非常に多くの額の資金が外国人のために調達されたことで、イングランド銀行にはどのような影響がありましたか。——特別にいうことは、ほとんどできませんが、もちろん、外国借款がおこなわれた結果、為替手形に対する非常に大きな需要が創り出されることになったにちがひありません。

あるいはまた、外国での事業活動への投資も、そこにおける一般的な経済発展をもたらすことになり、そうすれば、やはりそこへ綿製品を含む商品が、これまで以上に売れていくことにもなるだろう。ましてやラテン・アメリカにおいて金や銀が土のなかから掘り出されてくるといふのなら、それは、なおさらのことそうであるにちがひない。そして、イギリスからの輸出が増えて景気がよくなっていくのなら、イギリス国内にもまた綿製品等々がいっそう売れていくことにもなるだろう³²⁾——、たとえば、そうした見込みにもとづいて、今度はホルランドのいうところの「商品生産に対する一般的な投機」も引き起こされていくことになっていったのであった。

³¹⁾ Gt. Brit. Parliament [7], p. 204.

³²⁾ Tooke [28], Vol. II, p. 145 (邦訳, 第2巻, 137-138ページ), 参照。

III オーバートレーディングの到来

1823年における公認価格（official value；1694年の価格を基準に統計的に算出されたもの）によるイギリス（Great Britain；アイルランドを含まず）からの国内産品輸出額は、およそ4億3,800万ポンド・スターリングであった。この額は、1825年にはおよそ4億7,200万ポンドへと増加した。イギリスからの申告価格（時価）による国内産品輸出額でも、1823年のおよそ3億5,400万ポンドから1825年のおよそ3億8,900万ポンドへと、10パーセントあまりの増加が示されている³³⁾。

こちらの方は申告価格によるイギリス（United Kingdom；アイルランドを含む）からの国内産品輸出額の数字になるが、「アメリカ合衆国」向けには1823年のおよそ5,465万ポンド・スターリングから1825年のおよそ7,019万ポンドへの増加が記録されている。そして、また「中・南米諸国」向けにも1823年のおよそ4,219万ポンドから1825年のおよそ6,426万ポンドへと、かなりの増加が記録されたのであった³⁴⁾。

こうした輸出額の増加を主に支えたものは、当時すでにイギリスからのもっとも主要な輸出品目となっていた綿製品であった。イギリス（Great Britain）からの申告価格による綿製品の輸出額は、1823年にはおよそ1億6,300万ポンドで、先にふれた国内産品輸出額のおよそ46.0パーセントを占めていた。1825年には、同輸出額は1億8,300万ポンドとなって、同じ時期の国内産品輸出額の伸びを上回る割合で増加し、またそこに占める割合もおよそ47.0パーセントに高まったのであった³⁵⁾。

マンチェスター在住のジョージ・スミス（George

Smith）が、1833年7月27日にイギリス議会のある委員会に報告したところによれば³⁶⁾、綿製品、とくに綿糸の価格も、1820年代前半には上昇傾向にあったされる。スミスは、綿紡績業者にして手織りキャラコの製造業者でもあり、綿製品と綿糸の販売をおこなう委託代理商でもあり、またマンチェスターのジャス・マッセイ・アンド・サン社（Jas. Massey & Son）のパートナーでもあった人物である。すなわち、2等品質の74キャラコ（74 CALICO）の1反当たりの平均価格は、1823年には121ペンスであったが、1825年には122ペンスとなったのであった。これに対して、並品質の水力捻糸（Water-Twist）の30総すなわち1重量ポンド当たりの平均価格は、1823年には18 $\frac{3}{4}$ ペンスであったが、1825年には19 $\frac{3}{4}$ ペンスに上昇した。また、コップ横糸（Cop Weft）の40総すなわち1重量ポンド当たりの平均価格は、1823年には16 $\frac{1}{4}$ ペンスであったものが、こちらも1825年には17 $\frac{1}{2}$ ペンスに上昇したのであった。

1820年代前半には、綿製品が売れていくだろうという見込みにもとづいて、綿工業における工場や設備に対する投資も増えていった。マンチェスターおよびサルフォード（Salford）のタウンシップでは、1823年には都合72の綿工場が稼働していたが、1826年にはその数は92工場に増えた。このうち、とくに増えたのはマンチェスターにおける工場であり、その数は1823年の49工場から1826年の63工場となったのであった。サルフォードにおける工場の数については、1823年には5工場であったが、1826年には10工場へと、割合でいえばこちらの方では倍増が記録されている³⁷⁾。

前出のジョージ・スミスも、ちょうどこのころに、その事業を拡大していったもののひとりであった。スミスは、先の綿製品価格の報告とともに

33) Mitchell and Deane [16], p. 282, 参照。

34) Mitchell and Deane [16], pp. 313-314, 参照。

35) Mitchell and Deane [16], p. 302, 参照。

36) Gt. Brit. Parliament [8], pp. 568-569, 参照。

37) Baines [1], p. 395, 参照。

に、次のような証言もおこなっている³⁸⁾。

9046. それ〔1820年から1824年にかけての時期〕は、織布業だけをおこなっていたときですね。——はい、そして1825年には、織布業に加えて紡績業もはじめました。

9047. その時期には新しい工場を建てましたか。——1824年と1825年に新しい工場を建てました。

9048. そこには、入手できるなかで一番よく組み立てられた機械類を入れたのですか。——はい、私たちの判断にしたがって、一番よいものを入れました。

9049. その工場や機械類には相当な金額を費やしたのですか。——はい、20,000ポンド・スターリング以上です。

…〔略〕…

9052. いつそのお金を費やしたのですか。——1824年です。

9053. いつの時点ですか。——1824年に建物を建てはじめて、1825年に機械類を備え付け、ロンドンで恐慌(panic)が始まったところに紡績業を始めました。

9054. あなたのおっしゃった工場はいつ建てられたのですか。——1824年と1825年です。

9055. 1824年の末と1825年のはじめですね。——はい。

9056. その資本は、紡績という事業に一般的に用いられる資本よりも悪い条件で、あるいはよい条件で費やされたとお考えになる理由をお持ちですか。——それも、紡績という事業に一般的に費やされる資本と同様に費やされたと考えます。

「20,000ポンド・スターリング以上」もの費用をつぎ込んで、ジョージ・スミスによって新設された工場は、実に立派なものだった。それは、「耐火工場で大量の鉄を使ったもの」であり³⁹⁾、先の証言にもあるように、そこに備え付けられていた機械類も、その時点で「一番よいもの」だった。しかし、景気が次第に過熱していくにつれて、割り増し価格を払ってまでも競売に付された中古の機械類を入手して、設備の増設を試みるものもあ

らわれた。引き続き、ジョージ・スミスの証言によれば⁴⁰⁾——

9264. 通商の景気がよいときに織布業者が機械類を売る際には、その費用と価値の全額で、あるいは割り増しさえつけて売るのが当然なのでしょう。あるいはそうではないのですか。——機械類が競売で割り増しをつけて売られていた記憶があります。

9265. 機械類には、通商がよい状態にある際には割り増しをつけるのが当然なのでしょう。あるいはそうではないのですか。——1823年あるいは1824年に、マンチェスターの近くである機械類が広告にだされると、行って、新しいときにかかる以上の費用を払って、それを求める人がいました。

9266. 割り増しにもとづいてでも、通商を営む人々にとっては、常に利益のあるような通商であったわけではありませんか。——急いでそれをほしいときには、おそらく、それにより値をつけることでしよう。

こうした1820年代前半における工場や設備の増設は、多くの場合、前払い金、すなわち地方銀行からの融資にもとづいておこなわれた。オールダム(Oldham)近郊のクロンプトン(Crompton)にて、機械を用いた紡績業に携わっていたジョシュア・ミルン(Joshua Milne)は、ジョージ・スミスが証言をしたのと同じイギリス議会の委員会にて、1833年8月5日に次のように述べている⁴¹⁾。

11071. 綿紡績に従事している人で、工場や機械類以上の資本を持たないものがたくさんいるわけではありませんか。——それさえ持っていない人はたくさんいると思います。

11072. 工場や機械類を配置するのに必要なものの以上の資本を持っていなかったとしても、多くの人は、事業をはじめてしまっているわけではありませんか。——1825年以前には、多くの工場が紙券貨幣(paper money)の前払い金で建てられ、またいくつかの事例では、工場や機械類への支払いに必要な資産の半分しか持たない人々によって

38) Gt. Brit. Parliament [8], p. 549.

39) Gt. Brit. Parliament [8], p. 549, Q. 9060, 参照。

40) Gt. Brit. Parliament [8], p. 558.

41) Gt. Brit. Parliament [8], p. 656.

建てられたともいわれています。

マンチェスター銀行（the Bank of Manchester）の重役であったジョン・ベンジャミン・スミス（John Benjamin Smith）も、1832年7月17日にイギリス議会のある委員会で、同様の趣旨の証言をおこなっている⁴²⁾。

4364. 1825年には、そうした手形〔為替手形やドラフト〕が非常に広範に発行されたのですね。——計り知れないほどに広範でした。

4365. それらは、いまではそれほど広範囲には使われなくなっているわけですが、投機やオーバートレーディングのときには、使われていませんでしたか。——顧客が前払い金を申し込むときは、普通、彼らに3ヶ月後期限のロンドン宛てのドラフトを与え、その期限がきた際には、そのドラフトの支払いをするために顧客たちが銀行に現金を提供します。それは、ランカシアの銀行によって顧客たちに前払い金が与えられるときの普通の方法です。

4366. そうした類いの融通資金にもとづいて、かなりの投機が行われたことをご存知でしたか。——この種の方法で、非常に多額まで融通資金を得た商人がいたことを知っていました。

4367. 彼らは、そうした融通資金をなにに使いましたか。——彼らはそうした融通資金を、製造業品と原料を購入し、綿工場を建て、そして製造業を拡大することに使いました。

しかし、こうした時期に製造業者たちが「製造業品と原料を購入し、綿工場を建て、そして製造業を拡大」していったのは、売れていくだろうという単なる見込みにもとづいて綿製品を増産していこうということが前提となっている。地方銀行が、そうした工場や設備の増設に前払い金を提供したのも、その時期の金融緩和やマネー・サプライの増加という一般的な状況のなかで、そうすれば自分たちもまた儲かっていくだろうという単なる見込みにもとづいてのことではしなかったのだった。ベンジャミン・スミスは、続けて次のよ

うにも証言している⁴³⁾。

4368. それら〔ドラフト〕は、大きな工場や、そういった類いのものの建設を許すほどに発行されたのですか。——1824年と1825年の初期には、ランカシアの銀行の多くは、彼らの資金を借りるように、人々に対してもっとも強い勧誘を行いました。彼らの資金は、そうするほどに非常に多かったです。そして、そのことが工場の建設を導き、製造業を驚くべき規模にまで拡大させたのです。我々は、いまや、そうした有害な仕組みがもたらした結果のもとで苦しんでいます。工場や作業場が建設されてしまいましたが、それらは建設されるべきではありませんでした。それらは、その生産に対する需要が増加したからではなく、関係者がうまくやって、資金を貸しつける機会を持ち、そうすれば製造が増えることで、もっとうまくやれるだろうと考えたから、建設されたのです。

同じくマンチェスター銀行の重役を務めていたジョセフ・チェスボロー・ダイアー（Joseph Chesborough Dyer）によれば、この銀行は、要求払いのキャッシュ・ノート（cash notes）については発行していなかったものの、一方ではバンク・ポスト・ビル（Bank Post Bill）やドラフトといった「紙券（paper）」を発行していたのだという。この場合のバンク・ポスト・ビルは7日後払いのものであったのに対し、ロンドンの代理人に宛てた同行のドラフトには、30日後払いや60日後払い、90日後払いのものがあつたとされる⁴⁴⁾。先のジョン・ベンジャミン・スミスの証言では、銀行からの前払い金は「3ヶ月後期限のロンドン宛てのドラフト」で供与されたとされているが、いづれにせよ、それらは、いわば過振りされたものであつた。この点について、ジョン・ベンジャミン・スミスとともに召喚されたイギリス議会の委員会の席上で、ダイアーからは率直な懸念が示されている⁴⁵⁾。

⁴³⁾ Gt. Brit. Parliament [7], pp. 334-335.

⁴⁴⁾ Gt. Brit. Parliament [7], p. 305, QQ. 4122-4124, 参照.

⁴⁵⁾ Gt. Brit. Parliament [7], p. 326 & p. 327.

⁴²⁾ Gt. Brit. Parliament [7], p. 334.

4276. あなたのご意見では、銀行業者の為替手形 (Banker's bills of exchange) と商業手形 (mercantile bills of exchange) とには、どのような違いがありますか。——その違いは、次のようなものです。銀行業者の為替手形は、本質的には、その性格上は要求払いの銀行券 (a Bank note payable on demand) と同じものですが、しかし、銀行業者が時間を隔てて支払い可能となる為替手形を発行するときには、その業者が安全なものでなければ、それを取付することには、明日支払い可能となる為替手形を取付するよりも大きな危険がありますので、銀行業者の為替手形も要求払いの銀行券に比べれば確実なものではありません。銀行による為替手形の発行は、通商上になんらかの取引があったことの証明ではなく、信用の単なる交換です。つまり、銀行業者は、流通しないであろうものに対して、流通するであろう一片の紙券を作り出し産出するのです。銀行業者の為替手形は、そこに記された銀行の名前やスタンプを持つことによって流通することになるでしょう。… [略] …

4282. それでは、あなたの述べられた取引では、実際の取引のために振り出された為替手形によって基礎が与えられ、あるいは与えられるべきであると理解されているのではありませんか。——銀行業者が取付する為替手形は、すべて実際の取引のために振り出されるべきものです。しかし、銀行業者が与える為替手形は、滅多にそうではありません。

ここでのダイアリーの証言にみえる「銀行業者の為替手形」や「銀行業者が与える為替手形」というのは、もちろんドラフトのことである。そして、この「銀行の名前やスタンプを持つことによって流通する」ドラフトの振り出しは、「通商上になんらかの取引があったことの証明ではなく、信用の単なる交換」にすぎなかった。しかも、この「紙券」は、「3ヶ月後期限」といった一定の満期をもって振り出さるようになっており、この点もまた、この時期の融通資金の提供を容易にしていたのだった。このことは、ダイアリーの証言のなかでもうかがわれるが、先のベンジャミン・スミスも、さらに続けて次のように証言している⁴⁶⁾。

4369. 銀行業者たちが、もしキャッシュ・ノートのかたちで自行の紙券を発行していたのなら、あなたの言及された時期には、そうした前払い金の供与を行う傾向は少なかったのではないかとお思いですか。——キャッシュ・ノートのかたちでそれらが発行していたのなら、そうしたノートに要求払いする責任を負うことになったでしょうから、それはそう思います。しかし、3ヶ月の期日を持った手形を発行することで、支払いは延期されたのです。

一方、銀行から資金を借り受ける側のものも、通商上になんらかの取引があるということをつまりは「実際の取引のために振り出される」為替手形を割引のために銀行に持ち込むということをつまれば、必ずしも前提としていたわけではなかった。試みられたことは、売れていくだろうという単なる見込みにもとづいて綿製品を増産していこうというだけのことでしかなかった。ベンジャミン・スミスの言葉を借りれば、そのための工場を増設すれば、関係者たちは単に「……もっとうまくやれるだろうと考えた」にすぎなかったのである。このため、銀行から資金を借り受けるものは、その借り受けた資金で工場を増設し、その増設した工場を借り受けた資金の担保としていかにざるをえなかった。ベンジャミン・スミスの続いた証言によれば⁴⁷⁾ ——

4370. 借り手の個人的な担保 (security) にもとづいた貸し付けのことをおっしゃっておられるのですか、あるいは借り手によって与えられた手形の割引にもとづいた貸し付けのことをおっしゃっておられるのですか。——個人的な担保に、つまり多くの場合には、そうして貸されたお金で建てられた工場という担保にもとづいてなされた貸し付けのことを申し上げています。

4371. それでは事実の点でいえば、1825年中にはランカシアにはノートを発行する銀行はなかったが、ノートが発行されているイングランドの他の地域と同様に、紙券という通貨を拡大することでなされた多くの損害が存在したということですね。——存在したと思います。

⁴⁶⁾ Gt. Brit. Parliament [7], p. 335.

⁴⁷⁾ Gt. Brit. Parliament [7], p. 335.

4372. おっしゃったことからすると、もっと多くのものが存在したとお考えになっているようにお見受けいたしますが、——はい、もっと多くのものが存在したと思います。

こうした状況は、紛れもなくオーバートレーディングであった。引き続きベンジャミン・スミスによれば⁴⁸⁾——

4385. それでは、マンチェスターの銀行業者は、あなたが言及された時期には、単にそのように建設された工場という抵当にもとづいて、お金を貸していたのですか。——銀行業者は、ほかに担保を取ることができない場合には、工場を抵当にとったことでしょうか。しかし、製造業者たちに前払い金を支払うための手段を銀行業者に提供したものは、この紙券を発行した結果、銀行業者が持つことになった莫大な資本であったのです。銀行業者に自分たちには現金がたくさんあると感じさせたものは、大量の自行の紙券をなんとかうまく保てるようなままにしておける仕組みによるものであり、銀行業者にとっては、それは、できる限りのうまい方法でそれを使おうという強い誘因でしたし、また、いろいろな関係者に、そのうちのあるものは工場を建てたり、またあるものはいろいろな商品に投機をおこなったりしましたけれども、そうしたいろいろな関係者に貸し付けをおこなうときに、それをういたのです。

4386. オーバートレーディングをどのように考えていらっしゃるのですか。——製造業品目に対する追加的な需要からではなく、その供給を増加させる手段が供与されたことで、工場を建設し事業を拡大させる人のいるところを、そうしたオーバートレーディングとよんでいます。

4387. その人は、工場を建設しはじめる前に、その利用にもとづいて投機をおこなうのではありませんか。——その人は、疑いもなく、数量を倍増させても、それまで作っていた数量と同じ割合で利潤が上がるだろうという期待をもって、工場を建設するのです。

4388. 新しい工場を建設するという計画に乗りだしていく人は、オーバートレーディングをおこなっていると、どうして結論づけられるのですか。——お金を持たずに、売ることでできる以上の数量を生産するような工場を建設するよう仕向けられるときには、その人はオーバートレーディング

をおこなっています。工場を建設することで生産される追加的な数量を、処分できるような合理的な計画がないのであれば、資本を保有せずに工場を建設する人はいないでしょう。

つまり、オーバートレーディングは、単に「数量を倍増させても、それまで作っていた数量と同じ割合で利潤が上がるだろう」という期待をもって「商品が生産され、積み出されていくことなどにとどまるものではなかった。また、そのことを前提に「工場を建設し事業を拡大させる」ことなどにとどまるものでもなかった。「その供給を増加させる手段が供与されること」、すなわち、ここでは前払い金というかたちでの信用が、売れていくだろうという単なる見込みを支えてしまうことにまで、オーバートレーディングは及ぶのである。

たとえばナポレオン戦争後の金融緩和といったなんらかの理由が生じ、売れていくだろうという見込みがいったんもたれば、景気は非常によくなっていくように見える。実際、1820年代前半のランカシアの綿工業においては、工場が増設され、場合によっては中古の機械まで買い込まれて、そこに備え付けられていったのだった。事業を積極的に拡張しようとする人々が目の前に現れたので、ランカシアの地方銀行も、その人々に一定の満期をもって「紙券」を積極的に貸しつけた。しかし、繰り返すけれども、それらは、結局、売れていくだろうという見込みにもとづいてのことでしかなかったのであった。つまり、その見た目の景気よさは、「大量の自行の紙券をなんとかうまく保てるようなままにしておける仕組み」が、「銀行業者に自分たちには現金がたくさんあると感じさせた」ものにすぎなかったのである。

IV オーバートレーディングの帰結と要因

1824年も後半になると、棉花やインディゴ、米、ゴム、にくずくの種子、こしょう、ピメント、その他の香料や薬味類、べにばな、サフラン、カ

⁴⁸⁾ Gt. Brit. Parliament [7], p. 336.

り、真珠灰、油、コーヒー、コチニール、獣脂、砂糖、アヘン等々、要するに、ほとんどありとあらゆるというよい商品に対するの投機もはじまっていった。綿製品をはじめとする輸出商品が売れていくだろうという見込みは、やがて輸入商品にも及んでいったのである。このうち、もっとも広範に、そしてまた法外な価格がついて、人目を引くような投機の対象となったものは、棉花であった⁴⁹⁾。すなわち、この当時のイギリスからのもっとも主要な輸出品目であった綿製品の原料である。

これにより、たとえばジョージア産アップランド・コットン (Bowed Georgia) の価格は、1824年7月から11月には1重量ポンドあたり $7\frac{1}{2}$ から9ペンスであったものが、1824年12月から1825年6月には16から $18\frac{1}{2}$ ペンスに上昇した。また、東インド産の棉花の価格についても、1824年7月から11月には1重量ポンドあたり5から $6\frac{3}{4}$ ペンスであったが、1824年12月から1825年6月には10から13ペンスに上昇した⁵⁰⁾。イギリス (Great Britain) への公認価格での棉花の輸入額は、1823年のおよそ6,242万ポンド・スターリングから1825年の7,406万ポンドへと増加をしている。こうしたことから、その輸入量についても、この間にかかなりの増加をみせたものと推測される⁵¹⁾。

こうした原料である棉花の価格上昇には、そこから作り出される綿製品の価格上昇に比べれば、ずっと鋭い度合いがみられた。たとえば、先にふれたジョージ・スミスの報告によれば、2等品質の74キャリコの1反当たりの平均価格については、1823年から1825年にかけての上昇は、121ペンスから122ペンスへと、わずか1ペンスにとどまっている。また、並品質の水力撚糸の

1重量ポンド当たりの平均価格についても、1823年の $18\frac{3}{4}$ ペンスから1825年の $19\frac{3}{4}$ ペンスへの上昇でしかなかった。また、コップ横糸の1重量ポンド当たりの平均価格も、1823年の $16\frac{1}{4}$ ペンスから1825年の $17\frac{1}{2}$ ペンスへの上昇にとどまっていたのであった。これに対して、いまみたように、ジョージア産アップランド・コットンの価格や東インド産の棉花の価格は、わずか半年あまりの間に2倍以上も上昇したのであった。

売れるだろうという見込みにもとづいて、増設する工場を担保としながら資金を借り受けて工場を増設し、その増設した工場で綿製品の増産を試みたにもかかわらず、実際には原料コストがかさむばかりで、その増産した綿製品は思ったほどのよい値では売れてはいかない。そういうことであるならば、次に起こることは、もはや明らかであろう。綿紡績業者にして、機械による織布業者でもあったウィリアム・ラスボーン・グレッグ (William Rathbone Greg) は、1833年8月7日にイギリスのある委員会では、次のように証言している⁵²⁾。グレッグは、父親や兄弟たちとパートナーシップをもって、ランカシアのバリー (Burry) やランカスター (Lancaster)、チェシャーのウィルムスロー (Wilmslow)、マックルズフィールド (Macclesfield) 近郊のボリントン (Bollington) などに工場を所有していた人物である。

11539. 1824年と1825年に、工場の数に大きな増加があったかどうかご存知ですか。——はい、1824年と1825年には大きな増加がありました。

11540. 過度の (undue) 増加でしたか。——その通りでした。

11541. そのとき以来、そうした工場が稼働して、通商に圧迫を作り出すほどになっているのですか。——はい、そうです。

11542. 1826年以來、紡績業の利潤が低率であるのは、ある程度は、1824年と1825年の工場建設に対する投機に起因しているのですか。——大いにそうだというべきでしょう。

49) Tooke [28], Vol. II, p. 144 (邦訳, 第2巻, 136-137ページ), 参照。

50) Tooke [28], Vol. II, p. 157 (邦訳, 第2巻, 147ページ), 参照。

51) Mitchell and Deane [16], p. 289, 参照。

52) Gt. Brit. Parliament [8], p. 686.

11543. 利潤が低い状態であるにもかかわらず、綿製品に対する需要は恒常的に増加し続けているわけではありませんか。——増加し続けています。

11544. おそらく、その1825年の投機的な建設が起こらなかったのなら、綿紡績業は、現在でも利潤の上がる事業であり続けただろうと、それゆえ、推測してもよいではありませんか。——大いにあり得たことだと考えるべきでしょう。

11545. 需要と供給の状態が再び互いに調整し合うときには、我が国の綿紡績業や織布業には前進的な増加が存在し続けるだろうという見解を、支持する理由を見いだしますか。——私は、むしろ懐疑的です。少なくとも私は、自分たちの建物を広げること、わずかにでもお金を追加的に費やすことを躊躇します。

あるいはまた、前出のベンジャミン・スミスによる証言によれば⁵³⁾——

4379. あなたが示唆されたオーバートレーディングの時期には、マンチェスターの人は誰でも、3ヶ月の期日で銀行によって与えられた信用にもとづいて工場を建設するという冒険的の事業をおこなったのですか。——銀行からの資金融通という手段によって、多くの人が工場を建設したこと、また、そうした資金融通が手形で与えられ、関係者は、そうした手形が期限を迎えた際には、時には現金で支払いをおこなったことを知っています。

4380. 工場を建設した人は、少なくとも完成までに12ヶ月はかかったでしょうが、前払い金として与えられた手形の償還に当たって、どのような源泉から銀行の要求を満たすことができたのでしょうか。前払い金を、返済しないままの状態にしてしまっているのですか。——いくつかの事例では、前払い金を返済しないままの状態にしてしまっているようです。

そもそも、「3ヶ月の期日で銀行によって与えられた信用」によって、「少なくとも完成までに12ヶ月はかかった」工場の建設資金をまかなおうとする「冒険的の事業」自体に、いわば無理があったといつてよいだろう。このあとでも改めて示唆するように、ここで銀行によって与えられる信用は、もともとは、商品が売れていくだろうという

ことにもなって振り出される為替手形を銀行が買い取ることで、その基礎が与えられるものであった。商品流通を基礎とする短期の信用が、商品生産をおこなう工場を建設するための長期の資金需要をうまく支えていくことなど、やはり困難なものであろう。

しかし、もちろん、無理を承知で借り受けた前払い金がうまく返済できなくなったからといって、それを放置して「返済しないままの状態にしてしまっている」ということなども、実際には到底できないことであろう。それをなんとか返済しなければならぬのであれば、結局、担保となっていた工場や設備を処分していかざるをえない。これも前出のジョージ・スミスの証言によれば⁵⁴⁾——

9267. 織布業者が不景気になったときには、割り増しはもちろんなくなり、資本の大部分を失うことになりますか。——はい。ですから、それは大きな割引を被りがちです。

9268. 売却に付された40,000 錘の紡錘について言及されましたが、これらは倒産者の、つまり事業に失敗してしまった人の資産であったのですか。——それらは、倒産者つまり破産者の資産だといつてよいでしょう。

1825年10月末、アメリカとの主導的な貿易商社であったサミュエル・ウィリアムズ社(Samuel Williams & Co.)が、支払い停止に陥った。この商社は、その時点で51万7,000ポンド・スターリング分あまりの引き受けを負債としてもっていた。このため、この商社の引受手形をもつリヴァプールやマンチェスター、パーミンガムの商人たちも、重大な困難に直面してしまったのであった。同年12月までには、地方銀行も抵当貸し付けの回収にのりだし、正貨をいっそう蓄積しようと試みることになったのであった⁵⁵⁾。そしてまた、こうしたことと相前後して、イングランド銀行は、

⁵⁴⁾ Gt. Brit. Parliament [8], p. 558.

⁵⁵⁾ Pressnell [20], p. 485, 参照。

⁵³⁾ Gt. Brit. Parliament [7], p. 335.

輸入の増大にともなう正貨の流出に危機感を抱いて手形割引率を引き上げ、1825年春までにはラテン・アメリカ諸国への民間投資も破綻した。さらには、ラテン・アメリカ諸国の多くの政府債も、1826年1月以降、相次いで利払いを停止してしまった⁵⁶⁾。

しかし、こうした情勢のなかで、イギリスの地方銀行が、いくら貸し付けを回収しようとしても、借りた側が、その担保たる資産を処分しても、どうしてもそれを返済できないというのなら、今度は資金を貸し付けた側が重大な困難に直面してしまうこともまた、明らかである。これも前出のジョン・ホースレイ・パーマーの証言によれば⁵⁷⁾——

607. あなたが言及された国内需要の原因と性質は、どのようなものでしたか。——商業的な投機によって、いくつかの銀行業者は、そのなかでもとくにある銀行業者は、慎重であるべき範囲以上に広く、まったく換金できないような証券類に投資をおこなうことになったのです。それらの銀行業者は、地方銀行業者とも強いつながりをもっていました。私は、ポール社 (Pole & Co.) のことを申し上げているわけですが、この会社は、もともとはパートナーたちの個人的な資産を非常に多くもっていたのですが、当時の状況のなかでそれを失ってしまいました。この銀行の破産は、当初、商業の信用や銀行の信用に決定的な衝撃を与えましたが、同社と取引関係を持っていた非常に多くの地方銀行業者にも、同時に困難をもたらしました。そうした信用の失墜に、ロンドンと国内じゅうの一般的な信用の失墜が続いたのです。

それでは、こうした「信用の失墜」すなわち破滅を導いた1820年代前半のオーバートレーディングは、どのような要因によってもたらされたのであろうか。ジョージ・ウォード・ノーマンの証言によれば⁵⁸⁾——

2817. 外国の借款や、そのほかのさまざまな類の非常に多くの冒険的事業についての狂乱した

投機は、すべて、1825年の秋に起こった恐慌のひとつの主な原因だったというご意見をお持ちなのではないですか。——それらは、その当時広がっていた心理的な病気 (the mental malady) のひとつの症状だと思えますし、またもちろん、それらは一般的にはまったく利益をもたらさないような投機でしたから、それらは、相当程度、その時期の大惨事を引き起こしたものであったにちがいません。

ノーマンは、それを「心理的な病気のひとつの症状」だという。しかし、その「心理的な病気」は、信用が、実際上は無担保で、つまりはなんらの保証もなく供与されてしまうような仕組みにもとづいて発症したものであった。たしかに、ジョセフ・チェスボロー・ダイアーのいうように、当時の銀行業者も「実際の取引のために振り出される」為替手形を割り引いていたのかもしれない。しかし、その「実際の取引」というのは、たとえばラテン・アメリカ諸国で金や銀などが掘り出されてくることを前提に、綿製品等々が売れそうだという見込みにもとづいておこなわれたものにすぎなかったのである。

手形仲買人にして、ロンドン貨幣市場における取引やイングランドにおける大部分の地方の銀行業者との取引の双方にかかわっていたサミュエル・ガーニー (Samuel Gurney) は、1833年5月14日にイギリス議会のある委員会で、次のように証言している⁵⁹⁾。

232. 1824年や1825年には、非常に多くの為替手形が流通していたわけではなかったのですか。——していました。

233. ある一組の商品を表す手形が多数存在していること、つまり、一組の商品が繰り返し所有者を変え、その変えるごとに別個の為替手形で表されるようになっていた、こうしたことをご存知でしたでしょうか。——それは、それらの年にまさに起こったことで、所有者を頻繁に変えたことから、一組の商品を表す為替手形が多数存在していたのです。

234. それは、不健全で非現実的な事業活動の

56) Stone [25], p. 43 & p. 47, 参照。

57) Gt. Brit. Parliament [7], p. 47.

58) Gt. Brit. Parliament [7], p. 204.

59) Gt. Brit. Parliament [8], p. 13.

表れではないでしょうか。——疑いもなくそのとおりです。

つまり、売れるだろうという見込みがもたれさえすれば、その商品の流通にともなって、その「所有者を頻繁に変えたことから、一組の商品を表す為替手形が多数存在」することさえあったのであった。ドラフトは、そういう「不健全で非現実的な事業活動」を通じて振り出された為替手形を銀行が割り引いて、今度はそれを基礎として振り出されるものであった。それゆえ、ドラフトもまた結局は、売れそうだという見込みにもとづいたものになっていかざるをえないのだった。そして、それはまさに、委託荷販売を基礎としながら銀行制度と一体となって成立し展開していったファクター制度という仕組みの欠陥であり、それこそが、その当時のオーバートレードイングを引き起こした根本的な要因であったといえよう。

むすび

1820年代前半のオーバートレードイングは、商品が売れそうだという見込みにもとづいて引き起こされた。そうした見込みが、何らかの理由でいったん社会的にもたれてしまうと、その見込みにもとづいて商品が生産され、商品が流通し、その生産や流通に信用が供与されていく。ところが、そうした見込みは、当該の商品が実際にうまく売れていくかどうかということには直接的な関係をもたなかったため、やがて恐慌という破滅によって清算され、それに不況が続いていかざるをえなかった。しかし、こうした景気循環は、もともとは、「商品経済が支配する体制」である世界資本主義の経済が、その成立した時点でもっていた欠陥の表れであったと考えることができるであろう。「産業革命」期のファクター制度は、そうした世界資本主義の経済のもつ欠陥を、いわば制度として、仕組みのうえで具現化したもののひとつであったのである。

こうした景気循環について、バーミンガムの銀行業者であったトマス・アトウッド (Thomas Attwood, 1783-1856年) は、1832年8月2日に、イギリス議会のある委員会でのように述べている⁶⁰⁾。

5674. あなたは、この国の固定資本が完全に払底していると述べられましたね。——はい、お金の換えることができますので、そう考えます。

5675. あなたはまた、多くの場合、資本はすでにその持ち手を変えてしまっていると述べられましたね。——100,000ポンド・スターリング分の価値のある資本は、いくつかの場合には5,000ポンド分に減価してしまっています。その5,000ポンド分は、新しい持ち手に渡っており、その新しい持ち手は、その資本で機械製造業や貿易業を営むことができるようになりますが、それも、もうひとつ別の不景気によって、それを2,000ポンド分で売るように駆り立てられるまでのことです。ですから、不況 (depression) が進んでいくことには、限りがないように見えます。

5676. その過程、つまり資本が破滅するようなことは、いつはじまったとお考えですか。——1825年の秋のことです。最初は1816年にはじまって、それから1817年と1818年に情勢が変わりました。そして1819年に再び始まって、1822年まで続きました。そして再び情勢が変わって、好景気が1825年までやってきました。

5677. 1819年以来、バーミンガムの富は、少なくなったと理解しておられるのですね。——非常に深刻に受け止めています。バーミンガムの富は、1816年以前の半分にも満たないだろうと思います。

ここでのアトウッドは、とくにバーミンガムにおいて、その時々を経済的・金融的な「情勢が変わった」ことについて述べている。しかし、それは仕組みのうえで引き起こされたことであつたから、同様なことは、リヴァプールやマンチェスター

⁶⁰⁾ Gt. Brit. Parliament [7], pp. 459-460. なお、5675番の証言にある「100,000ポンド・スターリング分の (……worth 100,000*l.*)」は、前後の文脈から考えて「10,000ポンド・スターリング分の」の誤りではないかとも推測されるが、ここではそのままにしておいた。

でも、あるいはまたイギリス全土でも、世界資本主義の経済全体でも起こりうるはずのものであった。さらにはまた、ここでは1825年までの「情勢」について言及されているわけであるが、それは仕組みのうで引き起こされたことであつたから、その仕組みが変わらないかぎり、同様なことは、1820年代後半以降にも起こりうるはずのものであつたのである。

換言すれば、1820年代前半のオーバートレーディングは、ファクター制度が世界資本主義の経済とともに完成したのと同時に、その仕組みのうでの欠陥が露呈していく過程でもあつたと考えられる。1825年の恐慌は、その露呈した欠陥によって、世界的に編成された銀行制度と一体となったファクター制度が、早くも衰退の道をたどりはじめた契機であつたのである。

そして、そのファクター制度の欠陥が露呈していく過程や衰退していく契機はまた、1837年の恐慌を経て、19世紀の後半における世界通商の方法の変化を促すこととなつていった。つまり、当該時期の交通・通信手段の発展を背景に、世界商品は、売れるだろうという見込みにもとづいて積み出されていくのではなく、買われたことによって積み出されるようになっていくのである⁶¹⁾。そのことにより、1870年代には、商品が買われたことを前提とした荷為替信用制度という新たな世界通商の仕組みが、ファクター制度に取って代わるのである。

参考文献

[1] Baines, Edward, *History of the Cotton Manufacture in Great Britain: With a Notice of the its Early History in the East, and in all the Quarters of the Globe; A Description of the Great Mechanical Inventions, Which Have Caused its Unexampled Extension in Britain; And A View of the Present State of the Manufacture, and the Condition of the Classes Engaged in its*

Several Departments, London: H. Fisher, R. Fisher, and P. Jackson, [1835].

[2] Buck, Norman Sydney, *The Development of the Organisation of Anglo-American Trade 1800-1850*, Newton Abbott: David & Charles, 1969. — Repr. of 1925 ed.

[3] Clapham, John Harold, *The Bank of England: a History*, Cambridge: Cambridge University Press, 1944. — 邦訳: J. クラパム著, 英国金融史研究会訳『イングランド銀行: その歴史』ダイヤモンド社, 1970年.

[4] de Roover, Raymond Adrien, *Money, Banking and Credit in Mediaeval Bruges: Italian Merchant Bankers, Lombards and Money-changers: A Study in the Origins of Banking*, Cambridge (Mass.): Mediaeval Academy of America, 1948. — (*Publication (Mediaeval Academy of America)*; no. 51).

[5] English, Henry, *A Complete View of the Joint Stock Companies, Formed during the Years 1824 and 1825; Being Six Hundred and Twenty-Four in Number: Shewing the Amount of Capital, Number of Shares, Amount Advanced, Present Value, Amount Liable to be Called, Fluctuations in Price, Names of Bankers, Solicitors, &c. With a General Summary and Remarks. And an Appendix, Giving a List of Companies Formed, Antecedent to that Period; With Amount of Capital, Number of Shares, Dividends, &c.*, London: Boosey and Sons, 1827.

[6] Gayer, Arthur D., W. W. Rostow, Anna Jacobson Schwartz with the assistance of Isaiah Frank, *The Growth and Fluctuation of the British Economy, 1790-1850: An Historical, Statistical, and Theoretical Study of Britain's Economic Development*, Oxford: Clarendon Press, 1953.

[7] Gt. Brit. Parliament, House of Commons, *Report from the Committee of Secrecy on the Bank of England Charter; with the Minutes of Evidence, Appendix and Index*. Ordered, by the House of Commons, to be Printed, 11 August 1832. *House of Commons Parliamentary Papers*, 1831-32 [722], Vol. VI, pp. 1-677.

[8] _____, *Report from the Select Committee on*

⁶¹⁾ 入江 [14], 150-167 ページ, 参照.

- Manufactures, Commerce, and Shipping: with the Minutes of Evidence, and Appendix and Index.* Ordered, by The House of Commons, to be Printed, 19 August 1833. *British Parliamentary Papers*, 1833 [690], Vol. VI. — (*Irish University Press Series of British Parliamentary Papers*, Shannon: Irish University Press, c1968 [*IUP Library of Fundamental Source Books*], *Industrial Revolution Trade 2* にも収録).
- [9] _____, *Report from the Select Committee on the Law Relating to Merchants, Agents, or Factors; &c.* Ordered, by The House of Commons, to be Printed, 13 June 1823. *British Parliamentary Papers*, 1823 [452], Vol. IV.
- [10] _____, *Reports Respecting the Bank of England Resuming Cash Payments: viz. the First and Second Reports by the Lords Committees Appointed a Secret Committee to Enquire into the State of the Bank of England, with Respect to the Expediency of the Resumption of Cash Payments; —with Minutes of Evidence, and an Appendix: —7 May 1819: — Communicated by the Lords, 12th May 1819.* Ordered, by The House of Commons, to be Printed, 12 May 1819. *House of Commons Parliamentary Papers*, 1819 [291]. Vol. III, pp. 363-797.
- [11] _____, *Second Report from the Secret Committee on the Expediency of the Bank Resuming Cash Payments.* Ordered by the House of Commons, to be Printed 6 May 1819. *British Parliamentary Papers*, 1819 [282], Vol. III. — (*Irish University Press Series of British Parliamentary Papers*, Shannon: Irish University Press, c1968 [*IUP Library of Fundamental Source Books*], *Monetary Policy, General 2* にも収録).
- [12] Green, George David, *Finance and Economic Development in the Old South: Louisiana Banking, 1804-1861*, Stanford (Cal.) : Stanford University Press, 1972.
- [13] Hobson, C. K., *The Export of Capital*, London: Constable, 1914. — (*Studies in Economics and Political Science; Series of Monographs*, no. 38). — [邦訳] C. K. ホブソン著, 楊井克巳訳『資本輸出論』日本評論社, 1968年.
- [14] 入江節次郎『世界経済史の方法と展開——経済史の新しいパラダイム (1820-1914年)』藤原書店, 2002年.
- [15] King, W. T. C., *History of the London Discount Market. With an introduction by T. E. Gregory*, London: F. Cass, [1972]. — Repr. of the 1936 ed. — [邦訳] W. T. C. キング著, 藤沢正也訳『ロンドン割引市場史』日本経済評論社, 1978年.
- [16] Mitchell, B. R., with the collaboration of Phyllis Deane, *Abstract of British Historical Statistics*, London: Cambridge University Press, 1962.
- [17] [North, Dudley], *Discourses upon Trade; Principally Directed to the Cases of the Interest Coinage Clipping Increase of Money*, London, Printed for Tho. Baffet, 1691.
- [18] Porter, G. R., completely new edition, revised and brought up to date by F. W. Hirst, *The Progress of the Nation: In Its Various Social and Economic Relations, from the Beginning of the Nineteenth Century*, London: Methuen, 1912.
- [19] Powell, Ellis T., *The Evolution of the Money Market, 1385-1915 : An Historical and Analytical Study of the Rise and Development of Finance as a Centralised, Co-ordinated Force*, London: Financial News, 1915.
- [20] Pressnell, L. S., *Country Banking in the Industrial Revolution*, London: Clarendon Press, 1956.
- [21] Scarlett, John, *The Stile of Exchanges Containing Both Their Law & Custom As Practised Now in the Most Considerable Places of Exchange in Europe. Unfolding Divers Mysteries and Directing Every Person, Howfo Ever Concerned in a Bill of Exchange, to What He Ought to Do and Obferve, in Any Cafe, in Order to His Own security.* Translated out of Low & High Dutch, French and Italian-Latine Authors. The Whole being Methodically Digefted into Chapters and Sections, that by the Help of an Index Any Particular Cafe may Readily be Found, London: Printed for John Bringhurst..., 1682.
- [22] Silberling, Norman J., "British Financial Experience 1790-1830," *The Review of Economic Statistics Supplement*, Vol. I, No. 4, October, 1919, pp. [282]-297.

- [23] _____, "British Prices and Business Cycles 1779-1850," *The Review of Economic Statistics Supplement*, Prel. Vol. V, Supplement 2, October, 1823, pp. [220] - [261].
- [24] Smart, William, *Economic Annals of the Nineteenth Century*, London: Macmilian, 1910-1917. — 2 vols. (v. 1: 1801-1820, v. 2: 1821-1830).
- [25] Stone, Irving, *The Composition and Distribution of British Investment in Latin America, 1865 to 1913*, New York: Garland Pub., 1987. — (*South American and Latin American Economic History*).
- [26] 立川潔「『国富論』における「過剰取引 (overtrading)」——経済に内在する不安定性の認識」『経済研究』(成城大学), 第239号, 2023年1月, 83-107ページ.
- [27] 田中生夫『イギリス初期銀行史研究』日本評論社, 昭和41〔1966〕年.
- [28] Tooke, Thomas, *A History of Prices, and of the State of the Circulation, from 1793 to 1837: Preceded by a Brief Sketch of the State of Corn Trade in the Last Two Centuries*, London: Sporttisswood, [1967]. — Original edition published in 1793-1856. —〔邦訳〕トーマス・トゥック著, 藤塚知義訳『物価史』東洋経済新報社, 1978-1979年. — (金融経済研究所叢書; 別冊).